

3月 園だより

平成30年2月26日

佛教大学附属幼稚園



「声という第二の母胎」

園長 藤堂俊英

紅梅や白梅が咲きだす季節になると、「花卉のなかの鶯の舌は花に成らずして香る」という 古人の言葉を思い出します。そろそろ春告鳥（はるつげどり）といわれるウグイスのさえずりが聞かれるようになるころです。動物行動学者日高敏高先生の『ぼくの生物学講義—人間を知る 手がかり』の中に、「ウグイスはカーと鳴くか?」という次のような話が紹介されています。ウグイスの雛は学習しなくても成長すれば「ホーホケキョ」と鳴くのかと言えば、そうではない。雛を親鳥から離して育てると大きくなっても「ホーホケキョ」とは鳴けない。ウグイスの雛は 生後2日ぐらいすると耳が聞こえるようになる。そこで親鳥の声をテープに採って聞かせると、その声のする方を向いて一生懸命に聞く。そうやって大きくなると雛はちゃんと「ホーホケキョ」と鳴けるようになる。ところがカラスの声を録音したテープをいくら聞かせても、ウグイスの雛はその声の方を向こうともしないし聞こうともしない。そこでもう一度ウグイスの声のテープを聞かせると、声のする方向を向いてじっと聞く。つまりウグイスの雛は「ホーホケキョ」と鳴く能力を持って生まれてくるが、それは学習によって初めて鳴けるようになるのであって、ウグイスの雛にカラスの声をいくら聞かせても「カー、カー」と鳴くことはないということです。この話を本のサブタイトルにある「人間を知る手がかり」と結びつけるとすれば、ウグイスであれヒトであれ親の準備する声の環境が、子どもたちが健全に成長する第二の母胎となっている、ということになるでしょう。

話は変わるようですが三浦しおんの小説『舟を編む』は映画にもなったので見た人もおられるでしょう。主人公は大学院で言語学を専攻し、出版社に入社して3年目になる歯がゆいほどの真面目青年。物語は出版することになった日本語辞典の編集メンバーに彼が選ばれ、個性豊かな仲間と辞典づくりに没頭していく姿を描いたものです。辞典の名前は『大渡海』。ネーミングの意味は「辞典は言葉の海を渡る舟、編集者はその舟を編む者」というところにあります。「言葉の海」と言えば、現代の日本語辞典の礎となった大槻文彦の『言海』という辞典があります。この辞典が完成した時の進呈リストには、伊藤博文、福沢諭吉、勝海舟、榎本武揚といった名前があげられています。辞典のあとがきには「言海」というネーミングの典故として鎌倉時代の『続古今和歌集』があげられています。

私たちは誰もがある時は穏やか言葉の海を、ある時は厳しい言葉の海を渡っています。それだけに、どのような言葉の海を渡るにも方向を見失うことがないように、灯台の灯のような道しるべがあれば安心です。近ごろ気がかりなのは、言葉の海にも灯をともしことを忘れていないかということです。言葉は心という尊くも恐ろしいものを持ったヒトという生き物が創り出した最も洗練された道具です。それが私たちの暮らしから明るさやぬくもりを奪い冷酷な闇を作り出す、そのようなことを黙認してはなりません。私たちは第二の母胎である言葉の海にも、安心と信頼をもたらす言葉の灯を、ある時は点灯師となって、ある時は灯台守となつてともし続けて行きたいものです。